

SOHUM プログラム「湘南地域ブランド創造プロジェクト」

——『ベジタマもなかプロジェクト』『公民館プロジェクト』

『観光ボランティアプロジェクト』を中心に——

池村 明生^{*1}・隈本 純^{*2}・吉村 維元^{*3}・貴家 勝宏^{*4}

1. はじめに

2016年度に8年目を迎えた教養学部 SOHUM プログラムは、「人間学1」（秋／必修2単位）、「人間学2」（秋／選択2単位）の学部共通科目を中心に進められ、そのプログラムの一つである「湘南地域ブランド創造プロジェクト」は、本学が推進する地域連携活動である To-Collabo プログラムと連携を図る新たな取組みを含め、充実した内容をもって終了した。

特に2016年度は、従来から継続する取組みとは別に、2016年度 To-Collabo プログラム大学推進プロジェクト「地域デザイン計画 ブランド創造事業」として実施した『ベジタマもなかプロジェクト』を始動させ、また To-Collabo プログラムでめざしてきたパブリック・アチーブメント型（PA型）教育の先導的な取組みとして実施した『公民館プロジェクト』、そしてインバウンド観光を背景に学生たちのシティズンシップを高める『観光ボランティアプロジェクト』など、学生の教育に資する新規の取組みが実行できたことは、教養学部のみならず学内における実績として大いに評価できる内容であった。

これらの取組みは、本プロジェクトの担当教員によって、To-Collabo 推進室および現代教養センターから2017年3月に発行した「TOKAI CITIZENSHIP WAVE」（副題：東海大学のシティズンシップ教育のムーブメント——学部学科・センターのパブリック・アチーブメント型教育の浸透に向けて——）の冊子において事例として紹介されており、これまでの SOHUM プログラム「湘南地域ブランド創造プロジェクト」の成果を示すかたちとなった。

2. 2016年度「湘南地域ブランド創造プロジェクト」の活動概要

2016年度の「湘南地域ブランド創造プロジェクト」は、上述した3つのプロジェクト（『ベジタマもなかプロジェクト』『公民館プロジェクト』『観光ボランティアプロジェクト』）が特筆できる取組みであり、詳細については各プロジェクトをけん引した担当教員ごとに報告する。

受理日2017年11月22日

*1 教養学部芸術学科デザイン学課程教授 *2 教養学部人間環境学科社会環境課程准教授

*3 教養学部芸術学科美術学課程教授 *4 教養学部国際学科教授

一方、「湘南地域ブランド創造プロジェクト」では、上記3つのプロジェクト以外にも、様々な継続的な取組みが行われており、以下にその概要を報告する。

1) 平塚産農産物の地産地消費活動

「ベジ太プロジェクト」

平塚市農水産課が主体となる平塚産農産物の地産地消費及活動を、毎年継続的に学生がサポートしている取組みであり、2016年度は春と秋に地場で開催した市民参加イベントにおいて学生たちが会場に出向き、ぬり絵のサポートや着ぐるみを着用して子どもたちとふれあった。

① ひらつか緑化まつり（2016年4月29・30日）

平塚市総合公園／参加学生4名

② JAでてこいまつり（2016年11月12・13日）

平塚市総合公園／参加学生6名

その他、活動母体となる「ひらつかぞく推進委員会」（年間2回開催）に池村が出席し、2016年度の取組みについて検討した。



緑化まつりでサポートする学生



でてこいまつりでサポートする学生

2) 平塚市の漁業PR活動

「ひらつかタマ三郎プロジェクト」

平塚市ネーミングライツ事業の一環として2016年4月より使用開始された「ひらつかタマ三郎漁港」（平塚市漁港）の御披露目に際して、平塚市漁業協同組合より学生たちに横断幕やのぼり、ゲートの立て看板、イベントに利用する顔出し看板等のデザインが依頼され、その成果物を利用した展示会を開催した。

また東海大学湘南キャンパスで開催された「TOKAI グローカルフェスタ2016」の1プログラムとして“タマ三郎ストリートライブ”を開催し、大学院生や留学生を中心に来場者を楽しませる取組みを行った。

① ひらつかタマ三郎展（2016年4月11～16日）

サテライトオフィス／参加学生3名

② TOKAI グローカルフェスタ（2016年12月3日）

湘南キャンパス／参加学生5名



横断幕等を使った展示会



グローバルフェスタでの活動風景

3) 小田原銀座商店会「おだわら提灯プロジェクト」

5年目を迎えた継続プロジェクトであり、2016年度は学生8名により、パン屋・整体施術院・薬局・仏具店の4店舗のオリジナル提灯を制作した。そして小田原で開催される提灯まつりに合わせ、過去5年間で制作したオリジナル提灯29体が商店街の各店舗に飾られ、スタンプラリーイベントが開催された。

- ① 提灯づくり体験&視察（2016年5月7日）
小田原銀座商店街／参加学生8名
- ② オリジナル提灯制作（2016年6月～7月）
学内工房／参加学生8名
- ③ イベント期間（2016年7月21日～8月8日）
小田原銀座商店街



教室で小田原提灯を制作する学生



薬局の提灯を制作した学生たち

4) 二宮町みかん農家「みかん狩りサポート」

6年目を迎えたNPO 湘南スタイルが取り組む「みかんの木オーナーシップ事業」の“みかん狩りサポート”を、二宮町一色の井上農園で実施した。2016年度は「人間学2」を履修した人間環境学科社会環境課程の学生11名と担当教員1名で対応し、オーナーたちのみかん狩りのコンシエルジュとして活動した。

- ① みかん狩りサポート（2016年11月26日）
二宮町一色／参加学生11名



みかん狩りで箱詰めする学生たち

5) 伊勢原観光道灌まつり「ポスターデザイン」

第49回を迎えた伊勢原観光道灌まつりのポスターデザインを実行委員会の事務局を務める伊勢原市商工観光振興課より依頼され、デザイン学課程および芸術学研究科に在籍する4名の学生たちがそれぞれデザイン案を提案した。その後、実行委員会にて採用デザイン1点が決定し、採用された大学院生が印刷入稿データを作成し、10月1・2日の開催に合わせて小田急線全車両および県下の私鉄各駅にポスターが掲出された。

- ① 提案デザイン制作（2016年6月～7月）
参加学生4名
- ② 入稿用データ制作（2016年7月～8月）
参加学生1名



デザインした院生と完成ポスター

6) ラスカ平塚「ギャラリー作品展示」

2年前より取り組むラスカ平塚と東海大学の産学連携アートギャラリー「LUSCA HIRATSUKA & TOKAI UNIVARCITY ART GALLERY」において、第5回、第6回となる企画展を開催した。4月から9月までの第5回は「Japonesque」をテーマに、芸術学研究科に在籍する大学院生1名がイラストレーションの作品を発表。また10月から3月までの第6回は「路傍のゴミ」をテーマにデザイン学課程と卒業生の2名が写真作品を発表した。

さらに2017年4月からスタートする第7回展のテーマがラスカ側の要望により「七夕」となったことで、2016年7月開催された「湘南ひらつか七夕まつり」を3年次生8名が視察し、にぎわいのある風景をテーマに写真撮影を行った。

- ① 第5回「Japonesque」展（2016年4月～9月）
ラスカ平塚／参加学生1名
- ② 第6回「路傍のゴミ」展（2016年10月～3月）
ラスカ平塚／参加学生2名
- ③ 七夕まつり写真撮影ツアー（2016年7月10日）
平塚スターモール商店街／参加学生8名



第5回「Japonesque」展



第6回「路傍のゴミ」展



七夕まつり写真撮影ツアーの様子

以上が2016年度に行った継続プロジェクトであるが、これらのプロジェクトは SOHUM プログラム「湘南地域ブランド創造プロジェクト」の趣旨に合致する取り組みであり、参加した学生たちはそれぞれのプロジェクトにおいて学外の連携組織や関係者とのかかわりながら、目的や目標に応じた対応をもって一定の成果につなげた。これら6プロジェクトに参加した学生数はのべ61名であり、学部生・大学院生問わず様々な学生たちが関わる結果となった。

次に2016年度の特筆すべき3プロジェクト（『ベジタマもなかプロジェクト』『公民館プロジェクト』『観光ボランティアプロジェクト』）について報告する。『ベジタマもなかプロジェクト』は池村、『公民館プロジェクト』は隈本、『観光ボランティアプロジェクト』は貴家がそれぞれのプロジェクトをけん引したこともあり、各プロジェクトの概要・経緯・実施内容・成果といった流れをもって詳細に報告する。

3. 『ベジタマもなかプロジェクト』について（池村明生）

1) プロジェクトの概要

本プロジェクトは、SOHUM プログラム「湘南地域ブランド創造プロジェクト」の取り組みである一方、2016年度 To-Collabo プログラム大学推進プロジェクト「地域デザイン計画 プラ

ンド創造事業」，また平塚市市民大学交流事業観光推進事業に絡め，平塚市農水産課と東海大学が共同で立ち上げ2016年度からスタートした新たなプロジェクトである。

これまでに東海大学の学生がデザインして地産地消の普及に努めてきた2つのキャラクター「ベジ太」（平塚産農産物の地産地消の普及）と「ひらつかタマ三郎」（平塚市の漁業PR）を“もなか”の刻印として使い，平塚産のもち米を原料に焼き上げ，平塚市の食にかかわる関係者が地元の食材を活かした様々なオリジナルもなかの開発を通じて，平塚市の地域ブランドをめざす一連の活動を『ベジタマもなかプロジェクト』とした。よって本プロジェクトは従来からのキャラクターによる普及活動とは異なり，“もなか”という食材にかたちを変えたことで，それまでのJA 湘南，平塚市漁業協同組合といった野菜や米の生産，魚介類の水産，またそれぞれの流通関係者を超え，地元の飲食店組合や食品製造業，福祉事業者，学校関係者など，食にかかわる様々な関係者を巻き込む取組みとして発展することになった。

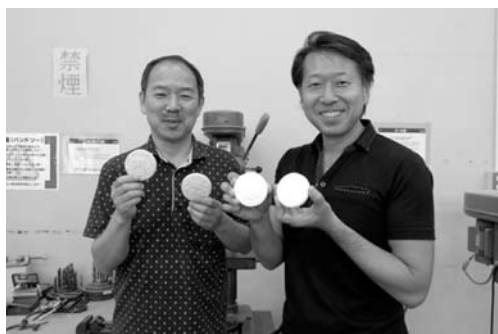
さらに“もなか”の具を餡に限定せず，自由に様々な食材をはさむオリジナルもなかの開発を優先したことにより，多数のオリジナルもなが誕生し，メディアを通じて広く市民に話題を提供することにつながった。

2) プロジェクトの経緯

本プロジェクトのもなか開発は，2015年度に開催された「ひらつかぞく推進委員会」（事務局：平塚市農水産課）において，委員であった池村から提案した。「ひらつかぞく推進委員会」では2012年度の「ベジ太」誕生以来，JA 湘南や池村が委員として参加し，平塚産農産物の普及促進における活動を計画して推進してきたが，5年目を迎える2016年度には新たな取組みが期待された。また「ベジ太」と「ひらつかタマ三郎」のキャラクターを活用した普及活動は，それまで東海大学の学生たちがそれぞれに関わり推進していたが，農産物と水産品など普及対象は異なるものの，市民に対して“地産地消”をアピールすることは同じであり，もなか開発を通じて生産者同士が協力しあうことで盛り上げることとした。

そして提案した“もなか”は平塚市にゆかりのあるテーマであった。2009年度に平塚市商業観光課から和菓子の調査が依頼され，学生たちと共に市内各所にある多数の和菓子店を巡ったが，その際に市内で唯一残っていた“もなか”の種（皮）の製造所も見学した。そこで知り得た「宿場町であった平塚市内には多くの和菓子店が点在」「“もなか”の皮は米が原料」「和菓子店は“もなか”の金型をそれぞれに製作」「“もなか”はそれぞれの和菓子店のブランド品」「しかし和菓子店が閉店する中，“もなか”の金型製造も徐々に衰退」といった知識や情報が本プロジェクトに活かされるかたちとなった。

本プロジェクトの目的は平塚産農産物や水産品の地産地消の普及であるが，もなか開発は一方で和菓子文化の継承であるとも捉えた。“もなか”というそれぞれの和菓子店を象徴してきたブランド品に，平塚市の地産地消をアピールするキャラクターを刻印することで，地元に根付いてきた和菓子文化の継承を含め，平塚市の地域ブランドの創造をめざす取組みと位置づけた。



原型づくりを担当した芸術工場の技術職員



デザインを担当した学生と焼き上がりもなか

3) プロジェクトの実施内容

本プロジェクトの初年度にあたる2016年度は、①もなか種（皮）の開発、②オリジナルもなかの試作開発、③プロジェクトの発信の3つの活動を推進した。またそれぞれの活動では「人間学2」や「ゼミナール」の授業を通じて学生たちに参加してもらい、SOHUM プログラムの実践型教育プログラムの題材とした。

① もなか種（皮）の開発

本プロジェクトのスタートで重要であったのが、もなか種（皮）の開発であった。「ベジ太」と「ひらつかタマ三郎」それぞれのデザインが刻印されるオリジナルのもなか種の開発においては、もなか種を焼き上げるための金型製造が必要であり、そのための原型を東海大学において開発した。

原型づくりでは、どのような刻印（デザイン）を施すかを決定するため、春学期のデザイン学課程で開講した「ゼミナール」の授業を通じて、履修する学生8名に原寸大のレリーフデザイン4点を提案してもらい、農水産課職員の意見を参考に1案に絞り込んだ。そして、決定した1案を元に芸術工場の技術職員に、金型製造に利用できる精度の高い原型2点を制作してもらった。

金型製造では、平塚市でもなか種の製造を行う種清商店と取引のあった名古屋市内の酒井製作所を紹介してもらい、2度の打ち合わせ訪問を通じ金型を発注した。そして金型は4ヶ月程度の期間を待って種清商店に納品され、その後オリジナルのもなか種を焼き上げた。

もなか種の開発に費やした期間は約7ヶ月間。5月にスタートして、もなか種が焼き上がったのが11月であった。また原型づくりから金型製造にかかった費用は、2016年度 To-Collabo プログラム大学推進プロジェクト「地域デザイン計画 ブランド創造事業」の予算を充てた。

② オリジナルもなかの試作開発

オリジナルもなかの試作開発では、平塚市内の飲食店組合や食品製造業、福祉事業者、学校関係者など、食にかかわる様々な関係者を巻き込む必要があり、農水産課の職員が中心となってプロジェクトへの参画を求めた。また参加に際しては、学生たちのアイデアを元に、“もな



弦斎角煮丼もなか（割烹竹万）



ベジ太ブルクリームサンド（マ・コピーヌ）

か”にはさむ具を餡などに限定せず、洋菓子やアイスクリーム、ごはんものやスープものなど、“もなか”の食材の可能性をできるだけ広げるように心がけた。アイデアは「人間学2」を履修した社会環境課程およびデザイン学課程の約20名の学生たちから寄せられ、それぞれのアイデアを分類整理しながら参加誘致用の資料として農水産課職員に渡された。

結果、2017年2月に開催した試食を含めたプロジェクトの記者発表会では、平塚市料理飲食業組合連合会など11事業者14種類のオリジナルもなかの試作品が揃った。以下が発表された試作品の商品名と製造事業者である。

1. 弦斎角煮丼もなか（割烹竹万）
2. 地魚もなちまき（株式会社ロコロジ）
3. サバ味噌チーズもなか（株式会社ロコロジ）
4. ひらベジアイスもなか（旬菜屋 Nob）
5. やきそばもなか（有限会社鷺）
6. くりいもきんとん最中（平塚市料理飲食業組合連合会）
7. 伊達巻最中（平塚市料理飲食業組合連合会）
8. もなコロ（肉の虎屋）
9. ひらコロメンチもなか（有限会社鳥仲商店）
10. イチゴあんもなか（有限会社鳥仲商店）
11. 湘南みかん最中（杵若）
12. タマちゃんの猫まんま「タマ茶漬け」（平塚地産地消食育研究会）
13. カオリ小麦のブラウニーもなか（社会福祉法人進和学園サンメッセしんわ）
14. ベジ太ブルクリームサンド（マ・コピーヌ）

オリジナルもなかの開発に費やした期間は約5ヶ月間。10月に学生たちのアイデア出しを行い、プロジェクトのキックオフとなる記者発表会は2月に開催された。また試作開発にかかった費用は参加した事業者の負担であったが、提供したもなか種を焼き上げる予算については平塚市市民大学交流事業観光推進事業の予算を充当した。



展示会場の展示の様子



展示会場で試食品を提供する学生たち



展示会場に訪れた平塚市長と学生たちの記念撮影



学校給食でもなかを食べる児童たち

③ プロジェクトの発信

2016年度の『ベジタマもなかプロジェクト』の最終目標は、オリジナルもなかの発表と試食体験ができる展示会の開催であった。そして展示会を通じて、関係者間の連携を図り、市民に対して話題を提供しながら、今後のプロジェクト活動の継続につなげることが重要であると捉えた。展示会は平塚駅前のスターモール商店街の一角で平塚市観光協会が運営するオープンスペース「ひらつか市民プラザ」において、3月初旬に開催することとした。

展示会タイトルは『もなかでひらつかを食べよう！展』。授業を通じて学生たちが考案したタイトルである。また展示会の開催においては、会場計画・広報物のデザイン制作・出展物の制作手配・期間中の会場運営サポートなど、秋学期の授業終了後の2月以降も様々な場面でデザイン学課程の3年次生が活躍した。学生たちが協力してくれなかったら、この期間に展示会は開催できなかった。

3月3・4・5日の3日間開催した展示会には、通りすがりの市民を含め多数の来場者が会場に訪れた。会場では試食品が食べられ、また様々なオリジナルもなかの試作品が展示され、本プロジェクトのお披露目にふさわしい機会となった。3月4日の読売新聞や神奈川新聞の朝刊には会場に詰めた学生たちや展示されたオリジナルもなかの写真が掲載され、記事として『ベジタマもなかプロジェクト』の取組みが紹介された。展示会場での発信とは別に、一般メディアを通じて広く市民に発信できたことは、本プロジェクトにとって大きな価値であった。

また2月に開催した記者発表会をきっかけに、もなかメニューを平塚市の学校給食においても採用したいとの話が平塚市学校給食課から持ち上がり、展覧会が終了した翌日の3月6日、平塚市立松延小学校の児童535名に、水ようかんをはさんで食べるベジタマもなかが提供され、地元の子どもたちに楽しんで食してもらう機会に恵まれた。

展覧会の開催費用については、会場費は平塚市市民大学交流事業観光推進事業の予算で行い、広報物の印刷費や出展物の材料費は学部等研究教育補助金として学部から配算されたSOHUMプログラム「湘南地域ブランド創造プロジェクト」予算を充当した。

4) プロジェクトの成果

本プロジェクトは、東海大学 To-Collabo プログラム・平塚市市民大学交流事業・教養学部 SOHUM プログラムといった3つの事業が絡む取組みで、それぞれの目的や目標をめざして遂行された。東海大学 To-Collabo プログラムにおいては「ブランド創造事業」を担う取組みとして、地域固有の人・もの・力を結集するプロジェクトに育ったことが大きな成果であり、次年度以降の取組みにおいても期待できる組織体制が整備された。また平塚市市民大学交流事業の成果としては、事務局となった農水産課と商業観光課との連携にもつながり、「観光推進事業」の一翼を担う基盤が整った。そして教養学部 SOHUM プログラムにとっては「湘南地域ブランド創造」のエポックメイキングな事例となり、学生の実践型教育プログラムにふさわしい取組みに結びついたことが成果である。

特に本プロジェクトは、学生たちにとって新たな地域の価値を築く創造性の高い取組みであり、自治体、団体、民間事業者をはじめ様々な人々が介在することで、立場の異なる多様な意見に耳を傾ける機会となった。このような地域連携の取組みを通じて学生たちはシティズンシップを学び、組織集団の中で自らの役割を担うことが求められるが、その意味において本プロジェクトは、To-Collabo プログラムや SOHUM プログラムがめざす学生たちの教育上の成果につながった。

そして2016年度に実施した取組みはすべて本プロジェクトの初期段階における活動であり、次年度以降においても学生たちと共に継続できる可能性を残しながら、組織体制の整備や実証実験、プロモート活動が推進できたことが大きな成果であった。

4. 『公民館プロジェクト』について（隈本 純）

1) プロジェクトの概要

本学が推進する地域連携活動である To-Collabo プログラムと連携を図る新たな取組みのひとつがこの『公民館プロジェクト』である。いわゆるパブリック・アチーブメント型（PA型）教育の先導的な取組みとして本学チャレンジセンターで開講する「プロジェクト実践B」（担当講師：現代教養センター、堀本麻由子准教授）と合同で実施した事例である。

今年度の活動では、人間環境学科社会環境課程の学生10名と芸術学科デザイン学課程の学生9名、「プロジェクト実践B」を受講する学生数十名が担当した。それぞれの学科課程の特色

や強みを活かした取組みを担当した。

2) プロジェクトの経緯

本プロジェクトは、前年度まで To-Collabo プログラムのひとつの取組みとして継続的に実施してきた、公共的な課題を学生や教職員、また市民がとともに考える「フリースペース」の一つのスタイルとして実施された。これまでに To-Collabo 推進室では公共的な特定課題をテーマに自主的な参加を前提としたワークショップ形式で「フリースペース」を開催してきたが、参加してもらう学生たちに、より主体的・積極的に公共的な課題を考えてもらえるように授業に絡め「フリースペース」を実践することとした。

また課題テーマとなった“公民館”については、日本の地方自治体の共通の取組みで、かつ今後の運営上の課題となっている“公民館”を取り上げたいと堀本准教授より要望があり、To-Collabo 推進室を通じて平塚市に打診して全面的に協力いただけることとなった。

結果、本プロジェクトは教養学部で学部共通授業である「人間学2（湘南地域ブランド創造プロジェクト）」と、チャレンジセンターで開講する「プロジェクト実践B」の合同授業で進められた。

3) プロジェクトの実施内容

本プロジェクトの目的は、平塚市26か所に点在する公民館の利用が停滞していることから、その新たな利活用について、学生が考えて市に提案することであった。プロジェクトは以下の3つのフェーズにわけてすすめられた。

① 現状把握・情報収集

まず、公民館とはどういう場所なのか、その実態を知らない学生が実は多い。そこで、10月24日、人間学2の履修学生に加え、チャレンジセンターで開講するプロジェクト実践Bの履修学生も参加しながら、平塚市中央公民館の佐野館長から平塚市の公民館の状況について話を伺い、その後学生たちはグループに分かれて公民館について議論するワークショップを行った。ワークショップでは招聘した平塚市公民館の主事の方々もグループに加わっていただき、ブレインストーミングが実施された。



グループに分かれ討議するワークショップ



グループで討議した内容を学生たちが発表



金目公民館で公民館の実状について話を聞く



金目公民館内の様々な施設を見学

② 現地調査・分析

それまで学内で討議した内容を踏まえ、11月7日、湘南キャンパスから一番近い平塚市立金目公民館に出向き、担当職員の方の案内で施設を見学した。30名ほど集まった学生たちは実際の環境や空間に触れ、利用実態や施設の装備や備品等、利用可能なハードウェアやソフトウェアについて教わった。そのことで、学生はより具体的な利活用の方法について考えることができた。

学生からは、「それまで公民館のことは知らなかったが、実際に施設を見学すると、いろいろな利活用のアイデアが浮かんできた」という意見が多数出された。こうした学生の気づきや学習テーマへの関心が、明らかに教室内だけの教育よりも高まることが認められた。

③ 提案立案・発表報告

施設見学で得られた情報や知見をもとに、具体的な利活用の方法等について提案を取りまとめた。合同で担当する「プロジェクト実践B」の履修生が3つの小グループにわかれて、アイデアを深掘する。本「湘南地域ブランド創造プロジェクト」においても、デザイン学課程の学生が1グループ、社会環境課程の学生10名が3グループにわかれて、それぞれひとつずつの提案とその案を支持するエビデンスをとりまとめた。

これらの提案は全体の報告会で発表される前に、「湘南ブランド創造プロジェクト」の授業のなかで、進捗状況報告が行われた。デザイン学課程1チームと社会環境課程3チームがどの



社会環境課程のゼミで発表しあう学生たち



社会環境課程のゼミで話し合う学生たち

ような提案を出そうとしているのかについて報告した。それぞれの案については担当教員らからコメントとフィードバックが与えられ、最終報告会に向けての内容の精査がすすめられた。

4) プロジェクトの成果

最後に平塚市の公民館の新たな利活用について、1学期間学生が学内外で調査研究してきた内容について、2017年1月23日、複数の公民館主事を招いて5つのチームが提言を発表する最終報告会が学内で実施された。

その報告会では平塚市公民館主事の方々にも同席してもらい、様々なコメントや意見を頂戴した。学生ならではの独創的なアイデアやプレゼン資料の作り込みに対して、高い評価をいただいた。それと同時に、費用をどう賄うのか、設置法や行政規制の面から実行可能なのか、利用料徴収や人的資源配分などの管理面の問題は大丈夫なのかなど、アイデアの現実妥当性に関して、多くの質問やコメントを頂戴した。

また、その後、東海大学の地域連携部署であるTo-Collabo推進室が平塚市と調整し、2月15日、平塚市中央公民館にて開催された公民館主事会議で、選抜された3チームがふたたび発表する機会を得た。発表の場には平塚市26か所の公民館の主事の方々をはじめ、平塚市教育委員会吉野教育長ならびに同教育委員会高橋社会教育部長が同席された。

3チームのうち「湘南ブランド創造プロジェクト」履修生グループからは、社会環境課程の3年生2名が代表して発表した。彼らのチームは、共働き世帯の増加や授業数増加に伴う宿題の増加を背景に、小学生が放課後に勉強できる場として公民館を利用できないかと考え、国内外事例の調査結果をふまえ、教職課程の大学生がボランティアで地域の小学生に宿題や勉強を教えるプランを提案した。発表後、主事の方から「君なら教えるか」「夏休み期間中の需要が高いと想定されるが、その期間でも大学生を派遣してもらえるのか」といった実際の運用を想定した具体的な質問が出された。発表した学生らは実際に教職課程で学ぶ友人へのヒアリング結果を交えながら、市からボランティアの証明書などをもらえれば動機づけは可能だと回答した。

平塚市吉野教育長からは、この提案は教職課程の大学生



学内最終報告会で発表する社会環境課程の学生



中央公民館の公民館主事会議で発表する学生



平塚市への提言として資料を渡す学生

にとっては教育実習以外の実践の場として意義深く、一方で児童の新たな学習の場だけでなく、放課後の安全な居場所確保という意味でも公民館が貢献できる可能性を示唆していると、高い評価を得た。

5. 『観光ボランティアプロジェクト』について（貴家勝宏）

1) プロジェクトの概要

プロジェクトの目的は、訪日外国人を対象にしたボランティア観光ガイドに取り組む活動を通じて、語学力の向上、国際異文化交流に関する理解を深めるとともに、柔軟に対応できる思考力・判断力や協働作業力を涵養することである。グローバル人材には総合的・学際的・多面的な能力の向上が求められ、主として異文化交流や語学力の研鑽という観点から取り組み、地域社会と国際交流活動に積極的に関わりコミュニケーション能力や積極性を養う。

2) プロジェクトの経緯

学生は自らの語学学習や地域への問題意識にもとづいてグループを形成し、地域の観光の課題を考える。現地の観光施設の視察や体験型施設の機会の状況を調べ、外国人旅行者への対応の状況を語学や設備面から整理する。「地域の観光資源にはどのようなものがあるのか」「訪日外国人に対し利用しやすいか」「また外国人旅行者は実際に訪問して満足度はどのくらいあるのか」「観光スポットを訪問して感じた問題点の発見」等、現地調査を通じて、地域が抱える観光面の課題を明らかにし解決方法を探っていく。実地例としては、鎌倉の観光資源を調査し、外国人を対象としたボランティア観光ガイドを多言語（英語、中国語、韓国語、ドイツ語、フランス語、ロシア語、スペイン語）で行う。

3) プロジェクトの実施内容

1. 訪日観光の実情と課題：文献や資料収集で、実情と課題を整理し理解する。実際にボランティア活動を行っている人等の話を伺う。
2. 事前調査活動：現地の観光スポットや体験型施設の調査対象をピックアップする。それぞれの外国語での対応力、案内のわかりやすさ等を調べる。自治体職員や観光振興関連に携わる人たち、また外国人旅行者へのアンケート等を作成し課題の抽出に活かす。
3. 外国人向けパンフレット作成：現地の観光資料やネットの情報を使い、英語、中国語、韓国語、フランス語、ドイツ語、スペイン語、ロシア語で資料（パンフレット）の作成。
4. 現地でボランティアガイドの実践：実際に作成した資料を基に、ガイド活動を行う。
5. 改善点の検討：実際に行った経験から反省点を検討する。
6. 効率的観光ガイドプログラムの開発：どの点の改善が必要なのか検討する。



学生と教員がともに参加した鎌倉でのプロジェクト



観光ボランティアの幟を広げて活動

4) プロジェクトの成果

学生が主体性をもって取り組んだことが重要である。訪日外国人に日本の良さを知っていただきたい、日本でいい経験をしてもらいたい、これらの気持ちを大切に、課題を発見し自ら解決策を考え、また実際にボランティア活動を行った。自らの活動について各自の目標を定めて取り組んだ。言語の面など、全てを揃えて行うことは難しく、さらなる自主性の発揮に期待したい。

6. おわりに

2016年度の SOHUM プログラム「湘南地域ブランド創造プロジェクト」は、前述した3つのプロジェクトを中心に、それぞれのプロジェクト目標の達成をめざして教職員・学生が共に取り組んだ実践型教育プログラムである。その過程では「人間学2」や「ゼミナール」の授業を通じて、担当教員が履修学生をけん引しながら、積極的に地域連携活動を活かした。

結果、『公民館プロジェクト』と『観光ボランティアプロジェクト』の2つのプロジェクトは、東海大学の To-Collabo 推進室および現代教養センターから2017年3月に発行された「TOKAI CITIZENSHIP WAVE」(副題: 東海大学のシティズンシップ教育のムーブメント—学部学科・センターのパブリック・アチーブメント型教育の浸透に向けて—)の冊子において、学生たちのシティズンシップを育む授業事例として紹介され、『ベジタマもなかプロジェクト』については2016年度 To-Collabo プログラム大学推進プロジェクト「地域デザイン計画ブランド創造事業」の湘南校舎における取組みとして報告された。それぞれのプロジェクトは、2009年度より教養学部において進められてきた SOHUM プログラムの大きな成果と考えている。また地域連携をテーマに取り組む一つの授業モデルに近づくアプローチであった。

秋学期に開講された「人間学2」の授業では、毎月1回、社会環境課程・デザイン学課程・国際学科の履修生全員が集まり、それぞれのプロジェクトの経過を報告しあい、専門性が活かせる取組みについては学生同士が互いの協力を求めた。また様々な取組みが錯綜する中、常にプロジェクトごとに担当を確認しあい、担当教員別の「ゼミナール」の授業と連携を図りなが



人間学1の授業で報告する社会環境課程の学生



人間学1の授業で報告するデザイン学課程の学生

らスケジュールに合わせ学生たちは奮闘した。

1月末、2年次生を対象に開講していた「人間学1（湘南地域ブランド創造プロジェクト）」の最終回の授業において、「人間学2」を履修して様々なプロジェクトをやり遂げた3年次生が、それぞれのプロジェクトの経過や成果を後輩たちに報告したが、発表した3年次生たちがそれぞれに、達成感を感じさせる態度で報告していたことが印象的であった。